

文ちゃんの

はるかな

知床

佐藤眞佐美



文ちゃんのはるかな知床

佐藤眞佐美

北海道新聞社

佐藤眞佐美 略歴

1939年3月、北海道斜里郡清里町生まれ。酪農学園野幌機農高等学校、札幌短期大学、玉川大学卒。酪農大学図書館、玉川大学図書館司書を経て、現在山梨学院短期大学講師、日本児童文学者協会理事。著書に『ジョンガラの歌がきこえる』『ぼくらは知床岬探検隊』（以上ポプラ社）など。近著は『怪奇大東京妖怪ゾーン』（ポプラ社）『百合子と宇宙人ビリビリの冒険』（草炎社）。

文ちゃんのはるかな知床

一九九二年十二月二十一日発行

定価 一三〇〇円

（本体二二六二円）

著者 佐藤眞佐美

発行者 乳井洋一

発行所 北海道新聞社

札幌市中央区大通西三丁目

電話札幌二二一局二一一

郵便番号〇六〇一九一

印刷 三陽印刷

製本 晴山製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

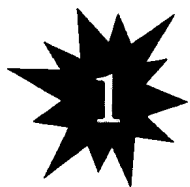
文ちゃんのはるかな知床◆目

次

1	あれから六十年	3
2	エゾは外国だ	11
3	ここは地獄の一丁目	37
4	ヌシのすむ沼	65
5	休み時間は大きわぎ	91
6	ある日タマシイがやってきた	111
7	食い切れないほどの豊作だ	147
8	オーシコイ、ホイサツサ	171
9	与兵衛山	195

知床開拓者に献ぐ（あとがきにかえて）	206
--------------------	-----

装幀 高山美根子
挿画 小椋真樹子



あれから六十年

圭湖、純湖、洋湖、弘湖、悦湖と、いつの間にやら名がついた。これまでの第一湖、第二湖などよりは風情がある。それぞれ異なる化粧で、それぞれに取り澄ましている。

文ちゃんはいま、五湖のうち最大の洋湖を目の前にし、瞬時言葉を失った。

わずかに自由のきく右手でゆっくりと車椅子を回し、景色の角度を変えた。左半身が麻痺していた。脳こうそくで倒れてから二年半あまり。一時は再起不能を危ぶんだが、どうにか右側だけは回復していた。

「こんなにきれいで、いいんだべか……」

ぼつりとつぶやいた。あまりの見事な眺めに、それだけ言うのがせいっぱいだった。

洋湖は知床連山を逆さに写し、ちよつと気取ったたたずまいで沈黙している。

「外国の風景みたいだな」

といってこれまで文ちゃんは、日本からただの半歩も出たことがない。おそらく、これから先も出ることはあるまい。

「文ちゃんにとつちゃ、ここが外国みたいなもんだったんだべさ」

車を運転してきてくれた農協の若い衆が、自分の父親以上に年の離れた文一郎じいさんを、友だちのようにちゃんづけで呼んだ。

七十に近い文一郎じいさんの、それが幼いときからの愛称だった。村ではへたに名前をいうより、その方がずっと通りがいい。

「うんだな。見るものみんな珍しかったも」

意味もなく文ちゃんは笑った。

あたりは観光客であふれている。

道路はすべて舗装され、最新型の車が猛スピードで突っ走り、色とりどりの都会の服装がかつぽする。駐車場には大型観光バスが並び、あとから来た車はスペースの空くのを待たなければならなかった。

むかし地面に穴を掘り、谷川の水で熱さを調節しながら入ったササ小屋温泉が、いまは見事なホテルに変わっていた。

「あのころは、ひどかったなあ……」

一瞬文ちゃんの心は、六十年のむかしにタイムスリップした。

ここ、知床半島の岩尾別いわおべつは一九一〇年代の終わりころ、文ちゃんが四歳から八歳までの四年間をすごした、忘れようにも忘れられない思い出の場所だった。

岩尾別を少し下るとウトロ港に出る。

むかしはただの岩場だったところに防波堤が築かれ、船首に「ライラック」と書かれた赤と白のスマートな遊覧船が停泊していた。ジャーンとドラが鳴り、もう一そこの「メロブル号」が、森繁久弥の歌で知られる「知床旅情」のメロディを奏でながら、都会の観光

客をつめこんで岬まわりに出航していった。

知床旅情の歌詞のいう、クナシリで白夜がみえるというのはまつ赤な嘘だが、いまは外国になつてゐる島の異国情緒をおおるには、それなりの効果がある。

オーシコイ、ホイサツサ

オーコイ、ホイヤー

オーシコイ、ホイサツサツト

ふいに文ちゃんの耳に、船頭衆の舟こぎ音頭がよみがえつてきた。

文ちゃんがこの舟こぎ音頭を口ずさむと、

「それだけはやめてくれーっ」

とうに天国へ旅立つてゐる文ちゃんの母さんが、顔色をかえて止めたつけ。

文ちゃんの目にあふころの光景が、ありありと浮かんでくる。

山形県の農民十四家族六十余人が、当時まだエゾというほうが通りのよかつた北海道へ開拓者として渡つてきたのは、春まだ浅い大正六年（一九一七）五月中旬のことだった。「やっとおれたちも、自分の土地がもてる」

「働けばはたらくだけ、みんな自分のものになるのだ」

「もう地主にとられないですむぞ」

と、だれの顔も明るかった。

開拓団の団長は津村利雄（仮名）といった。農学校出の二十三歳の青年である。妻と生まれたばかりの男の子、それにお手伝いの十六歳の少女が一緒だった。

「あの娘はたしか、団長のメカケだっていつてたな」

そんな記憶がある。

農学校を出られるのは限られた家の人だ。団長は開拓者であると同時に、農業を指導する官吏ではなかったか、と文ちゃんは想像している。その後消息を尋ねたが行方はわからない。

団長ほか二、三人をのぞいては、たいていが貧しい水のみ百姓だった。五反百姓かもしれない。大きな地主からいくらかの田んぼを借り、汗水たらして働いたあげく収穫した米はほとんど地主にとりあげられるという、みじめな小作人たちばかり。

それが、北海道ではどうだ。

新しい土地を切り拓けばひらいただけ、五年たつとそっくり自分のものになるという。

文ちゃんはそのころ知らなかったが、「開拓の栞」に書かれている国の説明では、一軒あたり五町歩（五畝）までは保証するという気前のいい話だった。五町歩といえば内地（本

州)の大地主とかわらない。信じられないような面積ではないか。

この開拓団のなかに、日本一の米どころ、山形県庄内地方(現在の鶴岡市の一部)からやってきた、やつと四歳になったばかりの文ちゃんもいたのだ。三十三歳の父文蔵と二十八歳の母澤江、それに二歳の妹ヨシノが一緒だった。

わずか四歳から八歳までしかここにいなかった文ちゃんが、なぜそんなことを覚えているのか、なぜにいまも鮮明に思い出すことができるのか不思議だが、団長の津村利雄と佐藤文蔵一家のほかには、つぎの人びとの名が記憶にある。あまりに異常な体験だったがゆえに、覚えていられたのかもしれない。

金村禪定(副団長)と妻、娘春乃(4)、息子光孝(2)。

朝野目銀次郎と妻、息子源之助(2)、銀次郎の弟源二郎(独身)、丹蔵(未成年)。

菅井政太郎と妻民江(佐藤文蔵の姉)、長男民吉(14)、次男文吉(12)、三男又治(7)、四男栄作(3)、五男正五郎(1)。

中村伊助と妻(政太郎の妹の夫)、長女伊佐江(14)、次女伊代(10)、三女峰(7)、長男音次郎(4)。

石垣政蔵(農学校卒)と妻、長女セイ(3)、長男良一(1)。

佐藤保次郎(羽黒山の修験者)と妻、長女キヨ(13)、次女キク(10)、長男留五郎(5)、次男仁太郎(3)。

金村与蔵（老齢で妻はいない）、長男要蔵（19）、長女ワリ（4）。

田宮清助と妻、長男清太郎（19）、次男清七（10）、三男清（5）、長女ハルエ（16）、次女キヨエ（13）、三女キヨミ（11）。

今野作治と妻、長男吉次郎（5）、長女サダ（3）、次女サダエ（3）、妻の弟（名失念）。奥山金蔵と妻、長女ユキエ（10）。

奥山甚八と妻。その縁者と思われる独身の若者奥山藤蔵とその弟由蔵（ともに年齢不詳）。塩野某とその一家（詳細失念）。



エゾは外国だ

四歳の文ちゃんは家を出てから先、自分の身に何が起こったのかまるでわからなかった。朝早く家を出た。

当時、新潟と鶴岡を結ぶ羽越線と、酒田・青森間の奥羽線はすでに開通していたが、どういうわけか鶴岡と余目の間だけ、まだ線路がなかった。

五里あまりを歩いた。

余目で、生まれて初めて汽車を見た。

白い湯気をシューと吹き、自分の背丈をこす鉄輪がゆつくりと動くさまを目の当たりにして、文ちゃんは興奮した。

家族そろってどこかへ行く……。

それだけはまちがいにかった。しかも汽車に乗って。こんなことはこれまで経験がない。客車は四人がけで、手摺もなにもない、木製のベンチだった。

「おがさん、木やうちが、ひとりでうしろさ飛んでいぐ！」

初めて汽車に乗り、移りかわる景色に驚嘆した。田んぼや家はすぐ見えなくなるのに、山だけはいつまでもついてくる。

「又ちゃんの顔がまっ黒だ！」

窓や乗り口から吹き込む煤煙で、同乗のいとこの顔が見る間にどす黒くなる。「おめだつてそうだぞ、文ちゃん」

けけといとこの又治がからかう。

秋田で乗り換え、能代で乗り換え、弘前で乗り換えた。珍しい汽車の旅もそろそろ飽きてきたころ、こんどは船だった。

「いよいよ、内地ともさいならだの」

いま降りた汽車のほうを、母さんがさびしそうにふりかえった。

「いつ帰ってこられるかわがんねえがら、いまのうちによく見ておくべし」

一緒の開拓団に加わった最上のおがさが、はるかな出羽の山並みへ目を向ける。月山、湯殿山、羽黒山など、見慣れた出羽の山はもうどこにもない。目の前に立ちはだかっているのは、秀麗な津軽富士岩木山だった。

最上のおがさんとは、最上地方へ嫁にいった文ちゃんの父親の姉で、地名を頭にかぶせてそう呼ぶのが山形の習わしだった。

文ちゃんはいとこたち、三つ年上の又治、ひとつ年下の栄作と手をつなぎ、海を見ていた。

ツガルの海。

最上のおどさや父さんたちは、そういつていた。それがどこらあたりなのか、文ちゃんには見当もつかない。庄内平野のまっただなかで生まれ育った文ちゃんたちは、汽車と同じく海をこんな間近に見るのも初めてなのだ。

當時の青函航路には英國製の比羅夫丸（一四八〇ト）と田村丸（一四七九ト）がそれぞれ一日一往復していた。ともに明治四十一年に就航した日本初の蒸気タービン船で、時速一八ノット。それまで七時間から八時間かかっていた青森・函館間一一七キを四時間で結ぶ。ただし港のつごうなどから、時刻表は四時間半から五時間に調節してある。

そのすばらしいスピードから、タービンは当時もとても速いものの代名詞で、函館や青森ではタービン輸送、タービン食堂など、迅速をモットーとする商売に、好んで冠せられていた。

一便比羅夫丸は青森16時45分発、函館着は21時15分だった。折り返し二便となり、函館発7時30分、青森着12時ちょうど。3便田村丸は青森発8時、函館着13時。帰りの四便は函館発16時20分、青森着21時20分。船賃は一等がベッドつきで三円、二等が二円、三等はカイコ棚式の二段ベッドで一円だった。

このころ大工の手間賃が一日一円二十銭、巡査の初任給十八円、米一升二十四銭、木賃宿一泊十銭と資料にある。

陸奥湾の沖あい五、六百メートルのところに巨大な船が停泊している。前とうしろにマストが二本。真ん中のぶつとい煙突からもくらくらと黒煙をはいている。

文ちゃんたちはその船を見ていた。

函館港には明治四十三年に棧橋が作られたけれども、青森港にはまだ棧橋がなかった。